

1-10

演題	医療連携による看取りプロジェクトの軌跡
副題	

看取り介護
医療連携

法人名	社会福祉法人 若竹大寿会
施設名	介護老人福祉施設 わかたけ富岡

発表者名 (職種)	鈴木 伸貴喜 介護支援専門員
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	横浜市金沢区富岡東 2-1-5
TEL	045-776-1230
FAX	045-776-1060
メールアドレス	wakataketomioka@wakatake.or.jp
URL	https://wakatake.net/category/facility/tomioka/

今回の発表施設 またはサービスの 概要	横浜市金沢区に2002年開所144床(本入所134床、ショートステイ10床)の従来型の特別養護老人ホーム。平均要介護度:3.8 「職員一丸となって人を幸せにします」の法人使命のもと、自分自身が利用したいサービスの実現に日々努めています。
---------------------------	--

研究の目的、PRポイント

介護老人福祉施設における看取り体制の確立と看取りケアの質の向上を目的とする

取り組んだ課題

開所から21年目を迎える当施設では、表題の取り組みの開始以前、嘱託医による診察は週1回であり夜間・休日対応ができないことが多く、本人・家族が施設での看取りを望まれていたとしても心肺停止となった際、救急搬送せざるを得ず死亡退所対応となるケースが少なくなかった。

実際にご家族から頂いた言葉、「ここで暮らせたことは感謝しています。ただお願いがあります。最後に心臓マッサージをしながら救急車を呼ぶのはやめてほしい。これからの人のためにもお願いします」本人・家族の希望を叶える為、また施設での看取りという社会的なニーズに応える為、平成31年より法人所属医と連携し、「看取りプロジェクト」を発足。体制づくりや実際の看取りケアの実践について本人・家族に寄り添って進めてきた軌跡を報告する。

具体的な取り組み

◆3つの連携を意識して取り組みを進めた

◇医師との連携

嘱託医に加えて、法人所属医・地域の病院勤務医と連携して施設に駆けつける体制を整えた。嘱託医との看取りのカンファレンス記録を医師同士で共有することで、呼吸停止時に連携医師が死亡確認できる体制を構築した。

◇看護師と介護職員の連携による看取りケアの実践

- ・最期までお食事を楽しむ(味わう)工夫
- ・思い出の写真を飾る、好きな音楽や香りを楽しみ穏やかに過ごせる工夫
- ・苦痛の少ないポジショニングと清潔保持
- ・コロナ禍での面会対応
- ・エンゼルケアとお見送り

看護師とともに看取りケアの振り返りを行い、今後のケアにつなげていった。

◇本人・家族との連携

基本的に家族との対応は介護支援専門員が行うこ

ととし、入所時のリビングウィルを活用した説明、食事量の低下や体調の変化に応じた説明、看取りカンファレンスに向けた段階的な説明を意識して行った。コロナ禍においても、面会の機会を活用して状態の説明を行った。また説明の際、何度も揺れ動く家族の気持ちを傾聴し、しっかりと寄り添う支援を心掛けた。

活動の成果と評価

○取組実施してから当施設の過去5年間の退所者数に対する看取り実施率

H30年度:29%(35名中10名)

R1年度:24%(42名中10名)

R2年度:63%(35名中22名)

R3年度:55%(55名中30名)

R4年度:58%(38名中22名)

※R2年より看取り加算算定開始。それ以前は嘱託医・配置医による死亡確認を集計したもの。

R2～4年度の看取り率(年平均):59%

R4年度 医師との看取りカンファレンスから死亡までの日数を期間別に集計すると「2週間以内」が最も多い結果となった。この結果はお食事を食べられなくなった方の状態変化が早いことと、本人・家族と一緒にギリギリまで悩みながら施設でお看取りの選択を支えていった結果であると考え

○看取り事例による成果報告

今後の課題

- ・施設での看取りケアが当たり前となるために
- ・人生会議ならぬ人生談義を
- ・より地域にひらかれた特養へ